

幼児期の子どもの認識に働きかける内服援助についての検討

東病棟3階 ○上尾和美 越村啓子 中川いずみ 小澤千実
金曾真紀 中村洋子 三村あかね

key word : 幼児期 認識 内服

I はじめに

小児の内服援助は、日常看護の場面で成長発達に応じて様々な方法で試みられ、実施されている。先行研究では内服がスムーズに行えるように、内服薬の味・形態の工夫、投与方法、内服に関する母親の意識調査、内服に関する看護師の認識などの研究の報告はあるが、子どもの認識に直接働きかける内服方法の研究はあまり見あたらない。今回、私達は、自我が芽生えはじめ反抗期にある幼児期の患児が内服を極端に拒んだ事例を経験し、様々な内服方法を試みたが内服は出来なかった。しかし、子どもの認識を考えた看護師の関わりによって内服が出来た。ここで、子どもの内服援助において子どもの認識を考慮して働きかけることは重要と考えた。

そこで、内服が出来なかった場面と内服が出来た場面を振り返り、患児が内服出来たという変化をもとに幼児期の子どもの認識に働きかける内服援助について検討し、今後の内服援助につなげていきたい。

II 研究方法

1. 期間 平成16年6月～9月
2. 事例紹介

A君(男児) 3歳1ヶ月

家族構成：父母 弟 祖父母

病名：急性リンパ性白血病

現病歴：急性リンパ性白血病のプロトコールに従い治療が行われ、寛解に入り一旦退院し、維持療法中。

内服状況：入院当初、苦味の少ない薬は、内服出来たらシールをシール表に貼る楽しみを持つことで粉末の薬を口に入れ、お茶でスムーズに内服出来ていた。プレドニンは、プロトコール上、6週間ごとに5日間、1日3回の内服が必須である。内服出来れば家庭で治療できるが、内服が出来なければ、入院して24時間の持続点滴を行い、側管よりプレドニンの注射薬を注入する必要がある。プレドニンの内服は、以前に一度挑戦したが苦味が強く、シール表による励ましは受け付けず、同時に飲んでいて苦味の少ない薬までも飲めなくなってしまい、プレドニンの内服を一旦中止し注射で投与していた。今回は二度目の挑戦である。

性格：明るく、変身ごっこが好きである。

3. 倫理的配慮

幼児は発達段階上、研究についての理解が困難なため、その家族に承諾書を用いて、研究についての主旨、プライバシーの保護、本研究以外に使用しないことを説明し、

同意を得た。またデータを分析するにあたり、個人が特定されないように配慮した。

4. データの収集、分析方法

内服が出来なかった場面(経験年数3年のB看護師)、内服が出来た場面(先輩看護師のC看護師)の2つの場面をプロセスレコードに起こし、研究者間で場面の状況が描けるか吟味した。

次に、児の変化に関与したと思われる看護師の認識と表現に注目して分析し、幼児期の子どもの認識に働きかける内服援助について、研究グループで評価・分析し、事例研究に精通している小児看護の教員からスーパーバイズを受けた。

III 結果

1. 内服が出来なかった経験年数3年のB看護師の内服援助場面(表1参照)

B看護師は、A君がしっかり内服出来るか内服援助に不安を持ち、ベッドの外から声掛けしA君と関わりを始めると、A君は内服に対して「いやー」と言ったが、更にB看護師は「頑張って飲もうか。」と内服を勧めた。B看護師は、A君が吐き出す可能性を予測して、苦味を緩和させようと甘味を加え、シリンジで口内に投与しようと工夫した。そして、A君を母に抱っこしてもらい口腔内に流し込む投与方法で「A君、頑張ってお薬飲もうか。」と内服を促したが、A君は泣きながら暴れて全身を使って抵抗し、必要な薬の量の半量しか内服出来なかった。半量の薬を飲めたことに対して、B看護師は「A君、頑張ったね。すごかったよー。次は全部飲もうね。」と褒めたが、「いやー」とA君は拒否を続けた。

つまり、この場面はA君の反応から、内服援助前と後では、変化は見られず、内服に対して拒否的で、嫌でも飲まなくては、というA君自ら内服しようという気持ちにならなかった場面である。(図1)

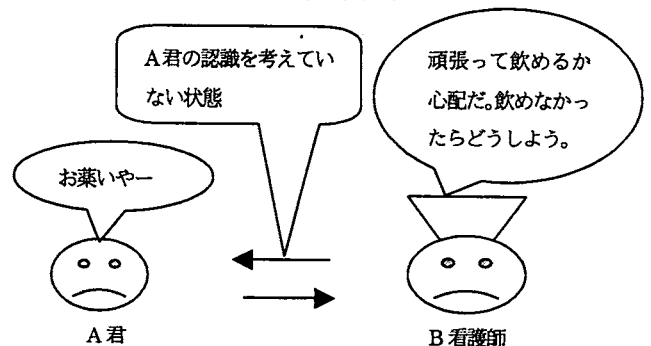


図1 内服が出来なかったB看護師の場面

2. 内服が出来た先輩看護師のC看護師の内服援助場面 (表2参照)

C看護師は、内服出来ると病気が治ることや、点滴がとれて家で家族と生活できる大切さから、A君にとっての内服の意味を考えて、絶対に内服させようという強い気持ちで内服援助を始めた。内服する場所は病室からナースセンターへと環境を変えた。内服を促す時には、C看護師自らA君を母親が母乳を与える姿勢で強く抱きしめA君に危険がないよう抑制し、絶対に内服しなくてはならないと認識するように働きかけた。また、変身ごっこが好きなA君に「強くなるために飲まなくてはならないんだよ。」などと、A君の気持ちを考えながら分かりやすく、内服しなくてはならない理由を何度も強い口調で説明すると、A君は泣きながらもプレドニンを内服した。内服後は、「ウルトラマンのように強いね。」とA君の好きなキャラクターに置き換えて褒めていた。母親は、C看護師の働きかけを見て、「あれだけ真剣にならないと飲まないんですね。」とこれまでの自分の内服援助を振り返っていた。C看護師の内服援助をきっかけに次の内服(17:30からの内服)からA君は、ナースセンターで他の看護師が同じ援助を繰り返す事で内服出来た。次の治療(3回目)では、シロップを使って病室で暴れずに内服出来るようになった。

つまり、この場面はA君の反応の変化から内服に拒否的だったA君が、強くなるために内服しなくてはならないという気持ちの変化を起こした場面といえる。(図2)

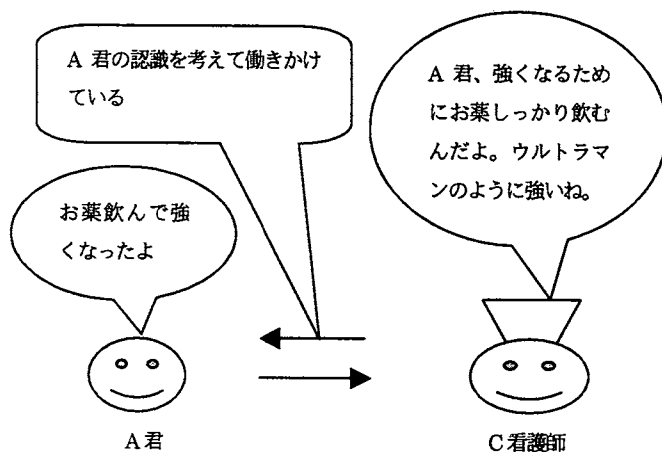


図2 内服が出来たC看護師の場面

IV 考察

C看護師とB看護師の内服援助の関わりの違いを分析し、A君の内服を成功させた要因について考察する。

C看護師は、内服出来ると病気が治ることや、点滴がとれて家で家族と生活できる大切さなど、A君の全体像からA君にとって内服出来ることの意味を捉えて絶対成功させようと意図的に関わっている。長田氏は「内服困難な子どもの関わりとして周囲の子どもを巻き込まず、

一人一人が自分の内服に集中できる環境を整えることが大切である。」¹⁾と述べており、内服する場所を病室ではないナースセンターに変えたことは、今から内服するという心構えを持たせることになったと考えられる。これはA君が「いやー」と言いながらも母親に手を引かれて応じていることから分かる。C看護師は、自我が芽生え反抗期の真っ最中であるA君に内服の重要性を分かってもらうために母親に抱きかかえてもらうのではなく、C看護師自らA君を、母親が母乳を与える姿勢でA君に危険のないよう抑制し、強く抱きかかえている。このことは大好きな母親には甘えられない状況を作り、いやでも頑張らなくてはならない気持ちにさせたと考える。鉄野氏は、「幼児期の子どもは、内服の重要性を理解することが難しいため、必要性を体験的に理解できるようになるまで強い態度で示していく必要がある。」²⁾と述べており、C看護師はいやでも内服しなくてはならないという看護師の強い思いを「絶対に飲むって約束しよう」と強い態度で何回も繰り返して伝えることは重要であったと考える。また、変身ごっこが好きなA君に理解しやすいように「強くなるために飲もう」と、なぜ薬を飲まないといけないかをA君がイメージしやすいように考えて声かけしている。つまり、A君の認識に意図的に働きかけているといえる。母親の「あれだけ真剣にならないと飲まないんですね。」という反応から、C看護師の真剣な姿を見せることは、今まで内服に積極的に取り組んでいた母親に、自分自身の我が子への関わりを見直す機会にもなったと思われる。

C看護師の関わりによってA君が次の内服から他の看護師の援助でも内服でき、次の治療からナースセンターに来なくても暴れずに内服出来たということはA君の大きな変化であり、A君の「がんばり」という持てる力を引き出し、体力の消耗を少なくした内服援助であったと考える。

C看護師の働きかけをもとにB看護師の働きかけを考えてみると、B看護師はA君が内服出来るか不安で、ベッドの外からの声かけとなっており、A君には内服の重要性が伝わらなかった。内服時は、吐き出す可能性を考え、苦味を緩和する工夫やシリンジで投与する手段で働きかけているが、工夫したことをA君には伝えていない。長田氏は「子どもにとって薬の形態や用法・用量が適しているか、負担が大きくないかを検討することは、内服の困難さを改善するうえで重要である。」³⁾と述べており、ここでの工夫は必要であったと考えられるが、苦味が緩和されたことをB看護師がA君に伝えることができたならA君の反応に変化があったかも知れない。B看護師の関わりの中でA君が「いやー」という言葉を多く発しているが、どうしていやなのかについて確認ができていない。苦くて飲みたくないのかA君の気持ちを想像して

表現してみると、これをきっかけにA君はどうしていやなのか話したかもしれない。また、半分の薬の量しか内服出来なかったことを「A君、頑張ったね。すごかったよー。」と声かけしているが、不快な思いをしたA君には何を頑張ったのか分かりにくく、半分の量を飲めたことが頑張ったことだと分かりやすく声かけすることが必要だったと考える。

以上より、B看護師の働きかけは、内服させなくては、という看護者としての思いが強く、五感を使いA君が理解できるように働きかけることは少なく、A君の認識への働きかけは意図的ではなかったことが分かった。海保氏は、「人間という人間はすべて認識をもっている存在であるが、この認識なるものは、その人の環境である対象が五感器官を通して反映されて脳細胞の中に像を結ぶことによって成立し、しかもそれと直接に頭脳活動としても認識の活動がはじまることになる」⁴⁾と述べており、B看護師もC看護師のようにA君の全体像を捉え、認識を考え、五感器官を通して思いを伝えることで、A君の内服に対する認識を変化させ、不快な刺激を少なくして前向きに内服出来たと考える。

V 結論

今回の事例で幼児期の子どもの内服援助は、投与方法の工夫に加え、更に全体像を把握し、認識を考え五感器官を通して援助を行うことで内服が可能になったと考える。

VI 研究の限界

今回の研究は、一人の患児の事例であり、一般化できないが、症例を積み重ね検討していく必要がある。

VII 謝辞

今回の研究にあたり、ご協力を頂いた福井県立大学看護福祉学部看護学科講師、赤川晴美先生に深く感謝致します。

引用文献

- 1) 筒井真優美：小児看護における技、P138、南江堂、2003
- 2) 鉄野和美：内服を嫌がる子どもの援助、小児看護、第24巻第5号、P617、へす出版、2001
- 3) 1)と同じ、P131
- 4) 海保静子：育児の認識学、P323、現代社、1999

表1 内服出来なかった場面 (経験年数3年のB看護師)

児の行動・言動	看護師はどう感じ、どう思ったか	看護師はどう行動したか
①本日は、内服して二日目である。1日目は、プレドニンを錠剤で挑戦したが暴れて吐き出してしまっている。	②昨日は、内服を極端に拒み、内服出来なかったという情報があり、今回は内服出来るか不安だ。飲ませられるか心配だ。内服が出来れば家で治療ができる。A君は、薬を泣き出す可能性もあるから、内服薬の飲ませ方を工夫して成功させよう。	③病室に入り、シリンジと薬を持って、児のいる柵ベッドに近づく。
④ナースが近づくと「あっち行ってー」と言いベッドの隅に行き逃げようとする。	⑤内服薬とシリンジを持ってきたので内服させられると気付いたのかなあ。今は、内服を頑張らなくてはならないからA君に自覚させるため、声掛けておこう。	⑥逃げようとするため、児には触れず、柵ベッドの外から「A君、頑張ってお薬飲もうか。」と声掛けする。
⑦「いやー」表情を暗くして、こちらをにらみつけ、内服を拒む。 母「A君、お薬飲んだら点滴とれてお家に帰れるよ。」	⑧前回は薬を錠剤や粉末の薬をお団子状にして口の中に入れても内服は失敗している。内服用のシロップに混ぜて苦味を緩和させても、困難であった。母親も協力的だし、今回は、母親と協力して、シリンジで口内に投与方法でやってみよう。	⑨母親にA君を抱っこして暴れる手足を抑制してもらい、B看護師がシリンジに粉末の薬を内服用シロップ2mlで溶かし、口内に薬を注入する方法で挑戦する。「A君お薬頑張って飲もう。」と声かけする。
⑩「いやー」四肢をばたつかせて口内に入った内服薬を吐き出してしまう。	⑪あー。薬を吐いてしまった。これでは、正確な量の内服ができない。口の中に薬を戻して、何とか飲んでもらわなくては。	⑫口の周囲に吐き出した薬をもう一度、指やシリンジで口内へ戻す。
⑬「えーん」 泣きながら、うつ伏せになって、何も受け付けようとしなない。	⑭今回は、半分の量(1ml)しか内服できなかった。もう半分は注射で投与方法になるが、これからも注射で投与方法しかないのか？ 今回は半分の量を内服出来たのだから褒めてあげよう。	⑮「A君、頑張ったね。すごかったよー。次は全部飲もうね。」
⑯「いやー」と怒り、目を合わせてくれない。	⑰シリンジで薬を投与方法でも吐き出してしまい、内服は困難だった。どうしよう。	⑱A君の感情を逆なでないように静かに病室を出る。

表2 内服が出来た場面（先輩看護師のC看護師）

児の言動・行動	看護師はどう感じ、どう思ったか	看護師はどう行動したか
	①薬を飲み始めて2日間、内服出来ていないとの情報があり、今日はどうしても内服出来るようにしなければならない。注射に頼りたくないな。家では弟も待っているし、一日でも早く家族と生活する日々に戻さなくては。病室は大部屋で他児もいて集中できないだろうからナースセンターで援助しよう。	②「お母さん、ナースセンターで薬を飲ませようと思いますからお茶やジュースを持って来てくださいね。」
③ナースセンターへ母親に手を取られてA君は「いやー」と言いながら、嫌な表情をして入ってくる。	④A君は、薬を飲まなければいけないと恐れてナースセンターに来たんだなあ。 3歳だし、厳しいかもしれないが絶対成功させない。母乳やミルクを飲ませる体位で内服させてみよう。	⑤プレドニン粉末を内服用シロップ2mlに溶かし準備する。母にぴったりとくっついているA君をC看護師が抱き寄せる。(強い口調で)「A君この薬はA君が強くなるためにどうしても飲まなくてはいけないの。絶対飲むって約束しよう。約束して。」
⑥今にも泣き出しそうな表情をして黙って看護師に抱かれるが、ぐっと目と口を閉じ、力を入れ、開けようとしなない。	⑦3歳だし、暴れるとすごい力がでるだろうな。危険のないように私の力が伝わるようにしなくては。	⑧C看護師の左上肢にA君の頭をのせ頭を固定し、手足が自由ににならないようにC看護師の右下肢と右脇ではさんで抱きかかえ、抑制する。「エーン」と泣き、口がわずかに開いたときC看護師の右手で内服薬をスプーンで投与しようとする。
⑨頑として口を開けない。すごい力で抵抗する。	⑩困ったな。ここで止めたら、これからは絶対飲まなくなってしまう。お願いA君、口を開いて。これから、長い治療が続くし、まだまだ薬を飲むことが続くんだよ。	⑪「A君、約束だよ。強くなるんだよ。お口を開けて。」と口調を強めて何回も繰り返す。
⑫「えーん」と泣き、声を出した後、わずかに力が弱まる。	⑬今だ。強くすすめたら口が開くだろう。	⑭わずかに開口した時「A君、お口開けてー」と危機が迫ったかのように語気を強めて言い、スプーンで口内の奥の方に薬を入れる。
⑮泣きながら、ゴックンと飲み込む。	⑯すごい。やっぱり飲んでくれた。嬉しい。	⑰「A君上手。ゴックンゴックン。」
⑱④から⑦を何回も繰り返し、全量飲み終わる。	⑲良かった。飲み込んで吐き出さないな。少しでも出たら正しい量が内服出来ない。お願い、吐かないで。しばらく、見ていよう。 大丈夫だなあ。抑制をゆるめよう。	⑳抑制をゆるめて抱きしめる。「ウルトラマンのように強いね。」と褒め、母親に抱いてもらうようにゆだねる。看護師の全身の力が抜けたようになる。
㉑泣きながらも、母親と共に手をつないで帰る。その後、短時間の午睡に入る。	㉒私も力が入らない位だし、A君も疲れただろう。頑張ってくれたなあ。	㉓しばらく、そっとしておこう。目が覚めたら褒めなくては。
㉔後で訪室すると(母)「Cさん、さっきはありがとうございました。あれだけ真剣にならないと飲まないんですね。家ではあれだけ真剣にできませんでした。」	㉕良かった。お母さんに分かっていただけで、後、何回か援助していかないとA君のものにならないかも知れない。	㉖夕方の薬は17:30からにしましょうね。
その後、A君は17:30から他の看護師が同じ援助を繰り返すことによって内服出来た。次の入院治療(3回目)では、シロップを使って病室で暴れずに内服出来るようになる。		